Kazu YUZUKI
ユズキカズインタビュー

——ユズキさんがガロに入選されたのは何歳の時だったんですか。

ユズキ　26歳くらいだったのかな。

——それまでは何をされていたんですか。

ユズキ　20歳から25歳くらいまで板前をやっていてその店がなくなっちゃたんで板前のバイトしていたんだよね。店がなくなって暇な時に喫茶店で（鈴木）翁二さんの4ページくらいのまんがを読んだのがまんがを描くきっかけだったのかもしれないね。

——ガロには何回くらい持ち込んでから入選になったんですか。

ユズキ　2、3回持っていったね。すげえヘタクソのやつ（笑）。当時は（鈴木）翁二さんのまんががすごい好きで、まねをして描いて持っていったんだよ。それを南さんに見てもらったんだけど、その時に細密に描くなら徹底的に細密に、ヘタに描くなら徹底的にヘタにやった方が良いと言われて、それは今でも印象に残っているね。

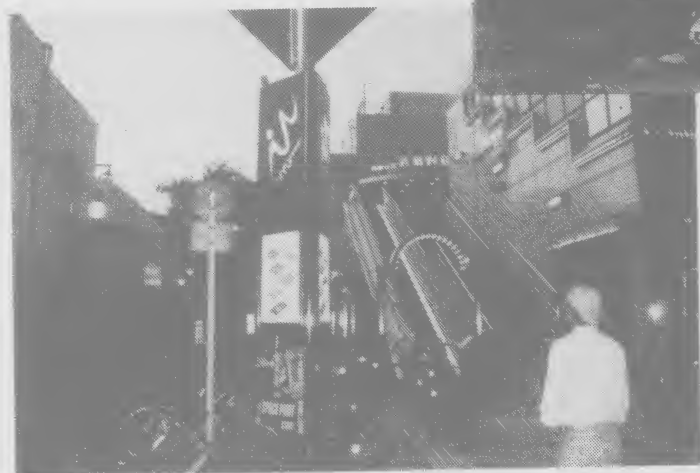
——それで「シカゴパレス」が入選するわけですが、あの作品は今は建て替えられて名前も変わってしまった自由が丘武蔵野推理劇場をモチーフにして描かれたものだそうですが、よく行かれてたんですか。

ユズキ　板前してる時に最初の店が自由が丘にあって、お昼の定食が終わった後に夜の仕込みに入る前の休憩時間があって、白衣来て行ってたよ。ゲタなんか履いてカラコロして（笑）。それでアパートもあの近くだったから休みの日もあの辺ブラブラして、見たい映画がなくても行ったりして映画館の人とも友達になったりしてね。

——それで映画はかなり見られたんですか。

ユズキ　田舎（静岡）にいたころは映画といっても面白い映画は来ていなかったから、東京に出てきてからフェリーニとかゴダールだとか見たんだよね。それで上野昂志さん山根貞男さん蓮實重彦さんの映画評とか読んでいたんだよ。蓮實さんの本を読んで、映画を見るときに、そこから時代状況を読んだり、思想を読み取るというんじゃなく、例えば雨はどういうふうに降るのかとか、まずスクリーンになにが映っているのかを見る、という見方があることが分かって、目からうろこが落ちるような気持ちになった。「シカゴパレス」を描いたのは、南さんに言われたことと、蓮實さんのその本が出たというのとで、映画館にあるものを徹底的に細密に描こうと思って描いたんだ。

——映画のポスターもいっぱい出てき

今は自由ヶ丘武蔵野館として営業中←自由ヶ丘武蔵野推理劇場

ますね。

ユズキ　ポスターとかなんでもいいというわけじゃなくて、何を貼るかというのをけっこう気にしちゃうんだよ。だからここに描いてあるポスターは好きな映画のものになっちゃうんだよね。それでそのポスターをライターで照らすところとか、磁石が出てくるところとか、少年が夜歩くところとか、翁二さんのまんがの場合は青年が酔っ払ってよくふあふあして歩くんだけど、ああゆうのがすごく好きだったから、これは翁二さんのように描こうとしたんじゃないけど、今見えると随所に翁二さん的なものが出てきている。

——映画館を描きたいというのと、少年を描きたいというので描かれたわけですね。

ユズキ　とにかく、場所とか、空間を描きたかったんだよね。だから「シカゴパレス」には映写室も出て来れば、座席も出てくるし、券を売る所とかロビーとか、最後にはトイレまで出てくるし、映画館を構成しているものは全部律義に描いて出てくるんだ。

——それは意識的に描こうとしたわけですよね。

ユズキ　そうそう。話はどうでもいいから映画館の中を少年2人がぐるっと一回りして外に出てくるという、そういうモチーフ。

——それで「シカゴパレス」の後1年くらいたって、「まゆこ理科室」を発表されますが、「シカゴパレス」から「まゆこ理科室」ではタッチが変わって、現在のユズキさんのタッチに近いかたちに変わってきていますね。

ユズキ　1年も描いてなかったから自然に変わっちゃたのかな。最初はつげ（義春）さんの「紅い花」みたいなものを描こうと思って、それと理科室という場所を描いてみたいというのがあったんだよ。

——この後しばらくまんがを描かれていないんですよね。

ユズキ　どうしてなんだろうね。そのころはプロになろうという気はなかったんだ。こういうまんがが一般誌に載ってお金がもらえるとは思わなかったし、板前の方の仕事が長くてそれに時間がつぶれちゃったのと、映画を見るのに忙しかったから（笑）。何かを描きたいという気持ちはあったんだけどね。

——その後白夜書房や「SMセレクト」等で描かれてから、『ぱく』で描き始めるわけですね。

ユズキ　畑中（純）さんが夜久（弘）さんに紹介してくれたんだよ。

武蔵野推理劇場の内部。この写真を参考にして「シカゴパレス」が描かれた。

――『ばく』で描かれた作品というのは、ユズキさんにとって充実した仕事だったんじゃないですか。

ユズキ　つげ義春さん、つげ忠男さん、畑中純さんたちと一緒の雑誌に載るっていうんで今では考えられないくらいすごい緊張して（笑）。それでけっこう絶対面白くなるみたいな意気込みもすごかった。「シカゴパレス」、「まゆこ理科室」や『ばく』の頃は1作1作せっぱつまった感じで、これを描いたらもうやめてもいいくらいの感じの緊張感の中で描いていた。

――『ばく』の最初の頃は、庭と縁側と少女をモチーフに描いてましたが、やはり場所を描きたいという気持ちが強いのですか。

ユズキ　今まで描いてきたのは全部場所だからね。作業の手順としてまずある場所を描きたいと思うと、カメラ持って近所にそういう場所はないかと探しに行くんだよ。『ばく』で描いた作品の風景は田舎なんだけど、実際は田舎ではなくて近所をカメラ持って歩いていると東京にも縁側と庭のある家があるじゃない。そういうところに行っては垣根のところから撮っているから、「なに撮っているんですか」、とか言われたりしてヘンな奴だと思われてる（笑）。

――あとユズキさんのまんがには植物がよく出てきますね。

ユズキ　つげ（義春）さんとかのまんがで植物を描いたコマはあったけど、植物をいっぱい描くというのは今まであまりないじゃない。だから植物をいっぱい描いたらどういう絵になるのかな、っていうんで漠然と描いたら面白いんじゃないかと思って描いていたんだ。

――その植物と関係があると思うんですが、ユズキさんの描かれる季節というのが夏が多いですね。

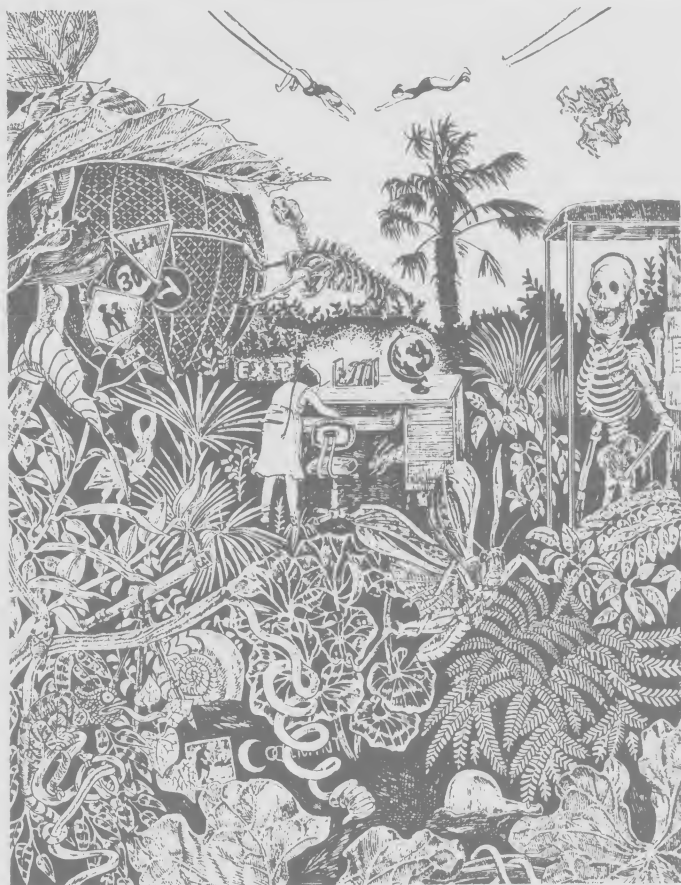
ユズキ　夏ばっかね。絵にしやすいのかな。夏になると薄着になるじゃない。シミーズ姿の女の子描きたかったから絶対夏だな、とかさ、あとノースリーブの女の子出したいから夏だな、とかさ。植物をいっぱい描くというのはそうした人間の存在とはまったく別個に植物自体が主張している、というので描いたんだ。

――普通まんがを描くときは植物とかは背景として描かれますけど、そうでなく植物も同じように描くということですか。

ユズキ　植物を普通に描く時は、例えば植物の葉っぱがはらはらと散ってそれで登場人物の気持ちを代弁させて人間の心理の反映みたいに叙情的に描くじゃない。そうじゃなくて登場人物がいくら落

「まゆこ理科室」（ガロ1982年5月号）

ち込んでいても全然関係無くいるような、そういうようなものとして描きたかったんだよね。だからある場面では植物が前面に出てきたりしてさ。あと南の開放された感じを出したかったんだ。だからまんがに描かれた場所をある人には四国の方ですか、とか九州の方ですかみたいに聞かれるけど、俺の中では静岡をイメージとして描いていてそれにもっと南の方の風景を意識的につけ加えているんだよ。

―― 南国的な感じは、『ばく』で後半描いたスコールみたいなものがあったり、瓜売りが出て来る感じとかで強くなってきていますね。

ユズキ 『ばく』の後半で描いた商店街を舞台にした少年たちの話は、はっきりアジア的というモチーフが始めにあって、アジア的な世界を描きたいと思った。けどそのアジア的ってなんだと言われちゃうと分からない（笑）。

―― その場所を描きたいというのが中心になっているからだと思いますが、ユズキさんのまんがはネームがあまり多くないですよね。

ユズキ 「うん」とか「そう」とか「はい」とか本当に単純な日常会話だけでひとつのまんがが出来て、それが面白かったらいいなというのがあるんだよね。

―― けれどかなりせりふは練っていますよね。

ユズキ 自分ではね（笑）。単純な言葉だけどけっこう考えちゃうんだよ、難しいんじゃなくて変なまぬけな言葉なんだけど。

―― あと登場人物のしぐさ、動きとかに気をつけてユズキさんは描いていますね。

ユズキ 『ばく』で少女を描いていたときは女の子を描こうというのがまずあって、それでなにを描こうというと、しぐさを描こうと思った。まんがってストーリーと絵があって、しぐさというのは、モロ絵じゃない。座る、横たわるとかね、少女的なしぐさっていっぱいあると思うから、そういうのをいっぱい描いていった。ストーリーはストーリーで動いていくんだけど、それとは関係なくしぐさはしぐさでいろんなしぐさをどんどん描いていくみたいにね。ストーリー的には悲しい場面でも、しぐさは全然悲しくないような楽しそうなしぐさをさせる、というそういう気持ちがあった。例えば映画館の中で女の子がちかんにあって、本当は悲しくてショックなことなんだけど、全然関係なくて瓜を投げながら遊んでいるシーンとか面白いな、と思った。

―― ユズキさんはまんがを描くうえで単純なものを描きたいという気持ちが強いんですか。

ユズキ そう、単純な言葉と単純なストーリーで面白いまんがが出来ればいいなと、それが理想なの（笑）。

※

◆今はもう手に入らない、ユズキカズ氏の日本文芸社より刊行された傑作短編集「枇杷の樹の下で」にガロ95年3月号掲載「夏の庭・ヘチマ娘危機一髪」を加えた単行本が小社より刊行予定アリ！詳しく決まり次第誌上でお知らせいたします。

◆構成…志村勝紀（ガロ）◆文責…ガロ編集部